

青年期における劣等感と競争心との関連

筑波大学大学院人間総合科学研究科 高坂 康雅

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 佐藤 有耕

The relation between inferiority feeling and competitiveness in adolescence

Yasumasa Kosaka and Yuhkoh Satoh (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the relation between inferiority feeling and competitiveness in adolescence. In the study, 549 adolescents were asked to complete a questionnaire consisting of 50 items relating to inferiority feeling and a competitiveness scale with four subscales. Cluster analysis results revealed four clusters: 1)adolescents with low competitiveness; 2)adolescents with high competitiveness; 3)adolescents with high ambition; 4)adolescents with low ambition and strong desire for praise from others. The results of analysis of variance indicate that adolescents with low ambition and strong desire for the praise from others have stronger inferiority feeling than adolescents with low competitiveness and adolescents with high ambition.

Key words: inferiority feeling, competitiveness, adolescence

問題と目的

本研究の目的は、青年期における劣等感と競争心との関連を明らかにすることである。

青年期は、児童期までの与えられた価値観が崩れ、自分なりの価値観を形成する時期である。この時期、青年の価値観は十分に形成されていないため、自己評価が不安定となり、自己の価値を確認するために他者の視線を気にしたり、何かにつけて他者と比較をしてしまう(高田, 1992)。また、現代社会は、「一般社会においても“競争に勝つ”ことがとかく注目を集めている」(太田, 2001)、いわゆる“競争社会”であり、青年も進学・就職などの機会において、社会から競争を強要されている状態にあると言えよう。このような心理状態・社会状態に置かれている青年が劣等感を抱くのは、必然であり、「青年期において劣等感がひととき重要なテーマ」(伊藤, 1993)と言われる所以である。

「青年期は他の時期に比べ劣等感が強まる時期」

(返田, 1986)ではあるが、すべての青年が劣等感を抱くわけではなく、競争心・競争主義¹⁾(筒井, 1975など)、内向性(関, 1981など)、完全主義・完全欲(高良, 1976など)のような性格特性をもつ青年が劣等感を強く抱くことが、これまで指摘されている。性格特性と劣等感との関連を検討した実証研究には、安塚(1983)がある。安塚(1983)は看護専門学生を対象として、矢田部・Guilford性格検査(YG検査)実施している。YG検査の12下位尺度のうち、劣等感尺度(I尺度)の得点をもとに対象者を高劣等感群と低劣等感群に分け、他の11下位尺度得点の比較を行っている。その結果、攻撃性得点と

1) 競争心は欲求であり、競争主義は価値観や価値観に基づく態度であることから、厳密には異なるものであるが、競争することや勝つことを重視すると言う点で共通していることから、本論文では競争主義に関する記述も、劣等感と競争心との関連を捉える資料として用いた。

のんきさ得点をのぞく9下位尺度得点において、二群間に有意な差がみられた。そのなかでも、高劣等感群は低劣等感群よりも思考的外向得点や社会的向外向得点が低いという結果は、関(1981)の「劣等感の内向性性格者に多い」という指摘を支持するものであろう。しかし、安塚(1983)のように劣等感と性格特性との関連を扱った研究は、国内では十分に行われているとは言えない。劣等感と関連のある性格特性が多くの文献で論じているにも関わらず、実証的な研究は少ないのが国内の劣等感研究の現状である(落合, 1994)。

そこで本研究では、青年の劣等感との関連が指摘されている性格特性のなかから競争心を取りあげ、劣等感と競争心との関連を検討する。競争心とは、「個人が、目標達成に関して、相手(他の個人ないしは集団)と競い合って相手に優越し、凌駕し、勝利を収めようとする欲求」(古畑, 2000)である。また、Bass(1986)は「競争心として強調されるべきものは報酬そのものではなく、むしろ、相手を打ち負かそうとする意欲である。焦点は勝つことであり、これが優越を求める欲求の本質である」と述べている。つまり、競争心とは、すでに優越であるのではなく、「勝ちたい・負けたくないという優越への思い」からくる欲求であり、「劣等感に基づいている」ものである(森, 2000)。

このような競争心と劣等感との関連について、筒井(1975)は、「劣等感とは能力主義と競争主義の世界に生きる人間が抱く必然的な感情である」と述べており、また、山岸(1984)は劣等感発生の背後に「競争社会といわれる現代社会の価値観」の存在を指摘している。さらに、関(1954)は劣等感の克服について、「競争よりも協力を旨とする社会が出現すれば、劣等感は克服されるのである」と述べている。筒井(1975)や山岸(1984)、関(1954)の指摘はいずれも、「社会の価値観」としての競争主義であるが、それが青年個人に内在化され“個人の価値観”としての競争主義や競争心となったとしても、劣等感と関連する可能性は十分に考えられる。これらの指摘から、競争心の強い青年ほど劣等感を強く抱えていることが推測される。

競争心が劣等感と関連しているものであるとしても、競争心自体がもともと望ましくない欲求であるとは言い切れない。古畑(2000)は、競争心には、活動の活性化、現実検証のようなポジティブな効果と、不安感の増大、相手に対する無関心などのネガティブな効果の両方があることを指摘している。このことから、競争心そのものが劣等感を強めるのではなく、競争心の中に劣等感を強める側面があると

考えられる。例えば、関口(2004)は、競争心の高い人の特徴をもとに4因子からなる競争心尺度を作成している。古畑(2000)の指摘を踏まえると、この4因子(側面)のなかに、ポジティブな効果を生じさせる側面もあれば、ネガティブな効果を生じさせる側面もあると考えられる。

しかし、これまでの劣等感研究では、このような競争心の複数の側面を考慮した上で劣等感と競争心との関連を言及してこなかった。そこで、本研究では、競争心には複数の側面があることを考慮し、競争心の側面を組みあわせた“競争心のもち方”による劣等感の強さの違いを検討することで、青年期における劣等感と競争心との関連を明らかにすることを目的とする。

本研究は、劣等感と競争心との関連を検討することで、「どのような青年が劣等感を強く感じやすいのか」という問いに対して、競争心という視点からアプローチしようとするものである。つまり、本研究によって、どのような競争心をもつ青年が劣等感を強く抱くのか明らかとなり、他者あるいは他者との競争についてどのような意味付けをすることが劣等感低減につながるのかという教育的示唆が得られるであろう。

方 法

調査対象者 宮崎県内の中学1～3年生204名(男子101名、女子103名;平均年齢13.25歳、標準偏差0.92歳)、宮崎県内の工業高校1～3年生173名(男子98名、女子75名;平均年齢16.27歳、標準偏差0.98歳)、茨城県内の大学生172名(男子85名、女子87名;平均年齢19.88歳、標準偏差1.19歳)、合計549名(男子284名、女子265名)を調査対象者とした。

調査時期 2006年6～7月。

調査内容 劣等感項目:高坂(2006)は青年期における劣等感の項目を作成し、中学生・高校生・大学生を対象とした調査を実施し、8因子を抽出している。本調査では、この8因子からそれぞれ7～8項目を選定し、合計50項目を使用した。使用された劣等感項目はすべて「○○な自分が人とくらべて劣っていると感じる」という文章形式となっており、「普段どのくらい自分が人とくらべて劣っていると感じますか」という教示のもと、「とても感じる」(5点)、「やや感じる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまり感じない」(2点)、「まったく感じない」(1点)の5件法で回答を求めた。

競争心項目:本調査では、関口(2004)の競争心尺

度の項目の一部を使用した。関口の競争心尺度は、競争心の高い人の特徴をもとに項目が作成されており、「勝ちへの執着」、「向上心」、「自己アピール」、「自己確認」という4因子から構成されている。本調査では、関口(2004)の因子分析によって各因子に負荷の高かった項目を5項目ずつ選定し使用した。「普段のあなたの気持ちや考えにどの程度あてはまりますか」という教示のもと、「とてもあてはまる」(5点)、「ややあてはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「全くあてはまらない」(1点)の5件法で回答を求めた。

実施方法 中学生・高校生については、学級担任がホームルームなどの時間を使用して、学級単位で実施した。大学生については、講義時間の一部を使用して、著者が集団で実施した。

結 果

劣等感項目の因子分析と得点化 劣等感項目50項目について、高坂(2006)に従い、因子数を8に指定して、最尤法・promax回転による因子分析を行ったところ、高坂(2006)と同様の8因子が抽出された。8因子での説明可能な分散の総和の割合は59.14%であった(Table 1)。

第1因子は「異性にうまく声をかけられない自分が人とくらべて劣っていると感じる」(負荷量.93；以下、「人とくらべて劣っていると感じる」は省略)、「異性と仲良くなれない自分」(.89)など、異性とうまくつきあうことができないために感じられる劣等感であると考えられ、「異性とのつきあいの苦手さ」と命名した。第2因子は「頭がよくない自分」(.89)、「成績が悪い自分」(.87)のように、学校での成績がよくないために感じられる劣等感であると考えられ、「学業成績の悪さ」と命名した。第3因子は、「運動オンチな自分」(.93)、「運動神経が鈍い自分」(.90)など、運動がうまくできないことによって感じられる劣等感であると考えられ、「運動能力の低さ」と命名した。第4因子は「親が立派でない自分」(.90)、「親の学歴がよくない自分」(.84)など、親の地位・経歴や家庭環境がよくないことなどに対して感じられる劣等感であると考えられるため、「家庭水準の低さ」と命名した。第5因子は「悪口を言ってしまう自分」(.82)、「いじわるな自分」(.79)のように、自分の性格の悪さについて感じられる劣等感であると考えられるため、「性格の悪さ」と命名した。第6因子は「友達グループにうまく入れない自分」(.89)、「友達づきあ

いが下手な自分」(.75)のように、友達をつくることがうまくできないことで感じられる劣等感であると考えられるため、「友達づくりの下手さ」と命名した。第7因子は「人に指示が出せない自分」(.82)、「リーダーシップがない自分」(.68)など、集団をまとめて導いていく力のなさによって感じられる劣等感であると考えられるため、「統率力の欠如」と命名した。第8因子は「スタイルがよくない自分」(.60)、「かっこよくない(かわいくない)自分」(.59)のように、容姿や容貌がよくないことから感じられる劣等感であると考えられるため、「身体的魅力のなさ」と命名した。

各因子に.40以上の負荷を示した項目の α 係数を算出したところ、.93～.81と十分な内的一貫性が確認されたため、各因子に.40以上の負荷を示している項目の平均値を算出し、各下位尺度得点を作成した(第1因子「異性とのつきあいの苦手さ」の得点を「異性とのつきあいの苦手さ」得点」と呼び、以下同様)。

競争心項目の主成分分析と得点化 競争心項目20項目について、関口(2004)に従い、因子数を4に指定して、最尤法・promax回転による因子分析を行ったが、関口(2004)のような4因子を抽出することができなかった。これは、関口(2004)の競争心尺度が、4因子とも10項目以上で構成されているのに対し、本研究では、各因子で5項目ずつしか使用しなかったことによるものと考えられる。そこで、下位尺度ごとに5項目での主成分分析を行った(Table 2)。その結果、各下位尺度において5項目すべてが第1主成分に対して.40以上の主成分負荷量を示した。また、下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、「勝ちへの執着」を除く3下位尺度は.90～.70と十分な内的一貫性が認められたが、「勝ちへの執念」は.57とやや低い値であった。しかし、関口(2004)の因子分析結果や、本調査での主成分分析の結果を含め、「勝ちへの執念」にもある程度の内的一貫性は認められると考え、各下位尺度の5項目の平均値を算出し、下位尺度得点を算出した。

競争心4下位尺度得点によるクラスター分析 青年個人の中では、競争心の4側面がそれぞれ個別にあるのではなく、組み合わせられて競争心を構成していると考えられる。本研究では、そのような競争心の組み合わせを「競争心のもち方」とし、競争心のもち方と劣等感との関連を明らかにすることを目的としている。そこで、競争心の4下位尺度得点を投入変数として、階層クラスター分析(Ward法・平方ユークリッド距離)を行い、クラスターの内容と人数構成から4クラスターが適当であると判断され

Table 1 劣等感項目の因子パターン (最尤法・promax 回転後)

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	h ²	平均 (標準偏差; 人数)
第1因子: 異性とのつきあいの苦しさ										
37: 異性にうまく声をかけられない自分 (異性)	.93	-.03	.05	.04	-.02	-.03	-.05	-.03	.80	2.75(1.36; 549)
45: 異性と仲良くない自分 (異性)	.89	.04	.03	.04	-.02	.07	-.07	-.10	.80	2.65(1.31; 549)
34: 異性とのつきあいが苦手な自分 (異性)	.84	.02	-.01	-.08	-.02	.11	.00	.01	.78	2.79(1.31; 548)
9: 異性と話すのが苦手な自分 (異性)	.78	-.09	-.03	-.05	-.03	-.15	.22	.18	.71	2.87(1.34; 548)
21: 異性の前で緊張してしまう自分 (異性)	.76	.04	-.10	.03	-.01	-.09	.08	.15	.64	2.73(1.35; 547)
25: 異性と親密な関係をつくれない自分 (異性)	.76	-.04	-.02	-.01	.03	.07	-.07	.06	.59	2.81(1.30; 545)
第2因子: 学業成績の悪さ										
29: 頭がよくない自分 (学業)	.02	.89	.06	-.08	.04	-.06	-.02	.03	.79	2.95(1.31; 548)
17: 成績が悪い自分 (学業)	-.06	.87	-.02	-.06	.02	-.05	.07	.08	.76	2.98(1.30; 546)
49: 学力が低い自分 (学業)	-.02	.83	.06	.03	-.06	.09	.01	-.04	.77	2.79(1.33; 549)
41: 成績が伸びない自分 (学業)	.02	.82	-.01	.02	-.03	.06	-.10	.05	.70	2.89(1.35; 548)
5: 勉強ができない自分 (学業)	-.03	.82	-.11	-.06	-.02	-.15	.15	.14	.65	3.15(1.28; 546)
44: 試験の結果がよくない自分 (学業)	.02	.81	-.04	.09	-.01	.06	-.01	-.11	.66	2.87(1.32; 549)
第3因子: 運動能力の低さ										
38: 運動オンチな自分 (運動)	.01	-.03	.93	-.02	.03	.04	-.04	-.03	.83	2.59(1.38; 549)
16: 運動神経が鈍い自分 (運動)	-.05	.00	.90	-.08	-.01	-.01	.00	-.11	.82	2.77(1.39; 549)
48: 運動がなかなかうまくならない自分 (運動)	.01	-.02	.82	.06	.00	.08	.04	-.13	.72	2.60(1.35; 548)
1: スポーツが苦手な自分 (運動)	-.05	-.12	.81	-.05	-.05	-.12	.13	.19	.66	2.99(1.35; 549)
28: 体力がない自分 (運動)	.02	.15	.66	-.05	.06	-.01	-.04	-.04	.51	2.82(1.38; 547)
4: 走るのが遅い自分 (運動)	.02	-.02	.63	.04	-.05	-.16	.06	.24	.51	2.90(1.34; 546)
第4因子: 家庭水準の低さ										
47: 親が立派でない自分 (家庭)	.04	-.11	.05	.90	-.02	.03	.01	-.10	.74	1.72(0.96; 549)
31: 親の学歴がよくない自分 (家庭)	-.07	-.02	-.06	.84	-.05	.03	.02	.00	.62	1.72(0.97; 545)
43: 家あまり裕福でない自分 (家庭)	.04	.07	-.01	.76	.05	-.02	-.02	-.05	.63	1.93(1.08; 548)
19: 家庭環境がよくない自分 (家庭)	.01	-.02	-.07	.70	.12	-.14	.07	.14	.57	2.01(1.13; 547)
12: 親の仕事を自慢できない自分 (家庭)	-.02	-.05	-.03	.70	-.02	.06	.04	.05	.51	1.96(1.10; 548)
7: 家柄がよくない自分 (家庭)	-.05	.10	-.05	.51	-.06	-.08	.16	.23	.45	2.06(1.16; 549)
40: 身長が低すぎる (高すぎる) 自分 (身体)	.11	.08	.12	.26	.06	-.02	-.07	.11	.24	2.40(1.31; 549)
第5因子: 性格の悪さ										
15: 悪口を言ってしまう自分 (性格)	.06	.04	-.01	.00	.82	-.06	-.19	-.04	.54	2.94(1.26; 546)
24: いじわるな自分 (性格)	-.01	-.07	-.03	.11	.79	.03	-.02	-.04	.61	2.66(1.24; 548)
10: 人のせいにしてしまう自分 (性格)	.03	-.06	-.03	-.08	.76	-.02	.09	.04	.56	2.97(1.28; 549)
18: 人を思いやることができない自分 (性格)	-.03	-.04	-.03	-.09	.69	.08	.03	.09	.50	2.87(1.28; 549)
27: うそをついてしまう自分 (性格)	-.05	.08	-.01	.03	.68	-.06	.13	-.06	.52	2.84(1.22; 549)
33: 短気な自分 (性格)	.02	.02	.07	.07	.59	.01	-.07	.00	.42	2.69(1.28; 549)
6: わがままな自分 (性格)	-.17	.00	.05	.03	.54	-.01	.07	.18	.43	2.84(1.25; 549)
第6因子: 友達づくりの下手さ										
35: 友達グループにうまく入れない自分 (友達)	-.06	.01	-.05	.01	-.10	.89	.04	.07	.71	2.70(1.29; 548)
23: 友達つきあいが下手な自分 (友達)	.03	-.03	-.05	-.08	.11	.75	.07	.05	.66	2.84(1.31; 546)
39: うまく友人と話せない自分 (友達)	-.01	.00	.08	.01	-.01	.74	-.03	.06	.61	2.44(1.24; 548)
11: うまく人間関係がつかれない自分 (友達)	.01	-.08	-.10	-.14	.04	.74	.07	.22	.59	3.12(1.29; 548)
42: 仲のよい友人がつかれない自分 (友達)	.01	.08	.03	.14	.05	.69	-.08	-.10	.61	2.37(1.23; 549)
14: 友人が少ない自分 (友達)	.02	-.06	-.05	.05	-.04	.69	.05	.08	.50	2.42(1.22; 546)
第7因子: 統率力の欠如										
8: 人に指示が出せない自分 (統率)	-.04	-.04	.01	.10	-.07	-.06	.82	.09	.64	2.74(1.28; 546)
46: リーダーシップがない自分 (統率)	.08	.05	.11	.07	.02	.12	.68	-.28	.71	2.85(1.31; 547)
50: グループをまとめられない自分 (統率)	.04	.06	.05	.11	.01	.20	.64	-.27	.69	2.70(1.27; 548)
3: 消極的な自分 (統率)	-.05	.00	-.02	-.09	-.08	.28	.41	.23	.38	3.11(1.26; 548)
26: 自分の意見がはっきり言えない自分 (統率)	.07	.11	.02	-.06	.08	.00	.39	-.04	.26	3.20(1.80; 549)
22: 決断力がない自分 (統率)	.17	.03	.04	-.11	.26	.09	.35	.01	.47	3.08(1.37; 547)
第8因子: 身体的魅力のなさ										
13: スタイルがよくない自分 (身体)	.04	.02	.09	.03	.01	.14	-.10	.60	.52	3.01(1.27; 542)
2: かっこよくない (かわいくない) 自分 (身体)	.08	.07	.07	-.09	.03	.03	-.03	.59	.46	3.41(1.18; 548)
20: 顔が丸い (細い) 自分 (身体)	.07	-.01	.05	.16	.04	.09	-.05	.51	.48	2.58(1.25; 549)
30: 太っている (やせている) 自分 (身体)	.00	.11	.18	.13	.00	.09	-.06	.44	.51	2.78(1.35; 549)
32: 足が短い自分 (身体)	.05	.12	.05	.21	.04	.07	-.09	.33	.36	2.40(1.29; 549)
36: 体つきが男 (女) らしくない自分 (身体)	.04	.07	.13	.11	.02	.17	-.02	.27	.35	2.42(1.24; 548)
	異性	学業	運動	家庭	性格	友達	統率	身体		
異性	-.34	.36	.35	.28	.55	.51	.44			
学業	.36	-.46	.44	.43	.45	.46	.52			
運動	.38	.51	-.35	.37	.44	.43	.55			
家庭	.37	.48	.40	-.37	.42	.41	.44			
性格	.31	.47	.43	.40	-.49	.43	.43			
友達	.57	.49	.49	.45	.54	-.63	.46			
統率	.52	.46	.43	.38	.45	.60	-.39			
身体	.37	.48	.48	.37	.37	.35	.37	-.81		
負荷量が.40以上の項目の α 係数	.93	.93	.92	.88	.87	.90	.82	.81		

注1) 項目後の「が人とくらべて劣っていると感じる」は省略した

注2) 項目後の () 内は高坂 (2006) での因子名

注3) 負荷量.40以上を太線で囲った

Table 2 競争心項目の主成分分析結果

勝ちへの執念 ($\alpha = .57$)	
9: 自分より優れた人に敵意を抱く (勝ち)	.76
5: 人に先を越されると悔しくて眠れない (勝ち)	.76
13: 競争相手の失敗はチャンスだと思う (勝ち)	.65
17: 勝つためにはルール違反もやむをえない (勝ち)	.45
1: 代表やリーダーになるのが好きである (勝ち)	.40
寄与率 (%)	38.83
向上心 ($\alpha = .70$)	
6: 自分よりも優れた人とでも勝負したい (向上)	.84
2: 目標としている人に挑みたい (向上)	.82
18: 何にでもチャレンジする (向上)	.71
14: 一度負けた相手とはもう勝負したくない (向上) ※	-.59
10: 努力した結果を試験や試合で確かめたい (向上)	.52
寄与率 (%)	49.81
自己アピール ($\alpha = .90$)	
19: 他者に勝ったときには自慢する (アピール)	.90
7: 勝者になったら誇らしげにふるまう (アピール)	.90
11: 勝者の証をみせびらかす (アピール)	.89
15: 勝利を大げさに表現する (アピール)	.84
3: 一番になったらみんなにいいふらしたい (アピール)	.82
寄与率 (%)	75.52
自己確認 ($\alpha = .75$)	
8: 何よりも勝つことが大切だと思う (確認)	.84
20: 自分の価値は勝者であるかで決まると思う (確認)	.79
12: 勝つことで他から評価されると思う (確認)	.78
4: 自分のためには勝つことである (確認)	.74
16: 人前で失敗したくない (確認)	.44
寄与率 (%)	53.80

注1) 項目後の () 内は関口 (2004) の因子名

注2) ※は逆転項目

た。また、学校段階ごとに同様のクラスター分析を行ったところ、どの学校段階においても類似した4クラスターがみられたことから、この4クラスターはどの学校段階にも共通した青年期の競争心のもち方を捉えていると考えられる。

各クラスターの特徴を明らかにするため、競争心4下位尺度得点を従属変数とし、クラスターを要因とした分散分析を行った (Table 3)。その結果、4下位尺度得点すべてにおいて、要因の効果が有意であった (「勝ちへの執念」 $F_{(3,540)} = 214.41, p < .001$; 「向上心」 $F_{(3,540)} = 135.80, p < .001$; 「自己アピール」 $F_{(3,540)} = 335.87, p < .001$; 「自己確認」 $F_{(3,540)} = 182.85, p < .001$)。そこで、多重比較 (本研究の多重比較はいずれも Tukey の HSD 法である) を行ったところ、「勝ちへの執着」得点と「自己確認」得点では、クラスター2が最も得点が高く、つ

いでクラスター3とクラスター4、そして、クラスター1が最も低い得点であった。「向上心」得点では、クラスター3、クラスター2、クラスター1、クラスター4の順で得点が有意に低くなっていた。「自己アピール」得点では、クラスター2、クラスター4、クラスター3、クラスター1の順で得点が有意に低くなっていた。

各クラスターの競争心4下位尺度得点と分散分析の結果から、4つのクラスターの特徴は以下のようによにまとめられる。クラスター1は「勝ちへの執着」得点、「自己アピール」得点、「自己確認」得点で最低点を示し、「向上心」得点も全体平均以下であった。このことから、クラスター1はそもそも人と競争しようという気持ちの少ない群と考えられることから、クラスター1を「低競争心群」と呼ぶ。クラスター2は、「勝ちへの執着」得点、「自己アピール」得点、「自己確認」得点で最高点を示し、「向上心」得点も全体平均よりも高い値であったことから、人と競争する意欲の強い群であると考えられる。そこで、「高競争心群」と呼ぶ。クラスター3は、「向上心」得点は最高点を示したものの、他の3得点は全体平均程度であることから、自分を高めるために競争しようとしている群であると言える。そこで、クラスター3を「向上心優位群」と呼ぶ。クラスター4は、「向上心」得点が最低点であったのに対し、「自己アピール」得点は高競争心群に次いで2番目に高かった。ここから、この群は競争し、勝利することで他者からの注目を集めようとしている群であると考えられるため、クラスター4を「誇示希求群」と呼ぶ。

競争心の4群間での劣等感得点の比較 競争心のもち方による劣等感の程度の違いを検討するため、競争心の4群ごとに劣等感8下位尺度得点を算出し、競争心の群を要因とした分散分析を行った (Table 4)。

まず、各クラスターの劣等感8下位尺度得点を見ると、8下位尺度得点すべてにおいて誇示希求群が最高得点を示した。一方、低競争心群は、「異性とのつきあいの苦手さ」得点、「学業成績の悪さ」得点、「家庭水準の低さ」得点、「性格の悪さ」得点、「友達づくりの下手さ」得点の5下位尺度で最低得点を示した。また、向上心優位群は「運動能力の低さ」得点、「統率力の欠如」得点、「身体的魅力のなさ」得点の3下位尺度得点で最低得点を、示した。

次に、分散分析の結果をみると、「異性とのつきあいの苦手さ」得点 ($F_{(3,540)} = 5.00, p < .01$)、「運動能力の低さ」得点 ($F_{(3,540)} = 3.26, p < .05$)、「家庭水準の低さ」得点 ($F_{(3,540)} = 4.19, p < .01$)、「友

Table 3 競争心4クラスターの平均(標準偏差)と分散分析結果

	対象者全体	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	分散分析結果
人数	548名	187名	99名	136名	126名	
勝ちへの執着	2.69 (0.75)	2.01 (0.51)	3.53 (0.54)	2.91 (0.51)	2.81 (0.47)	214.41*** 高>向・誇>低
向上心	3.63 (0.82)	3.31 (0.82)	4.04 (0.52)	4.34 (0.43)	2.99 (0.53)	135.30*** 向>高>低>誇
自己アピール	2.58 (1.00)	1.67 (0.53)	3.83 (0.66)	2.42 (0.57)	3.15 (0.65)	335.87*** 高>誇>向>低
自己確認	3.13 (0.87)	2.42 (0.66)	4.17 (0.58)	3.18 (0.62)	3.30 (0.55)	182.85*** 高>向・誇>低
	クラスター名	低競争心群	高競争心群	向上心優位群	誇示希求群	

注1) 平均+1/2標準偏差以上の値は太線で囲み、平均-1/2標準偏差以下の値は太点線で囲った

注2) *** $p < .001$

注3) 分散分析結果の上段はF値、下段は多重比較の結果である。多重比較結果の略称は、低：低競争心群、高：高競争心群、向：向上心優位群、誇：誇示希求群を、それぞれ示している

Table 4 競争心クラスターを要因とした劣等感8下位尺度得点の分散分析結果

劣等感得点	対象者全体	低競争心群	高競争心群	向上心優位群	誇示希求群	分散分析結果
異性とのつきあいの苦しさ	2.76 (1.15)	2.56 (1.17)	2.87 (1.16)	2.71 (1.15)	3.05 (1.03)	5.00** 誇>低
学業成績の悪さ	2.94 (1.14)	2.85 (1.14)	2.95 (1.19)	2.98 (1.23)	3.01 (1.02)	n.s.
運動能力の低さ	2.78 (1.14)	2.74 (1.17)	2.71 (1.18)	2.63 (1.12)	3.04 (1.07)	3.26* 誇>向
家庭水準の低さ	1.90 (0.85)	1.77 (0.80)	1.99 (0.94)	1.84 (0.81)	2.09 (0.86)	4.19** 誇>低
性格の悪さ	2.83 (0.94)	2.71 (0.97)	2.89 (0.98)	2.85 (0.97)	2.93 (0.81)	n.s.
友達づくりの下手さ	2.65 (1.02)	2.48 (1.03)	2.66 (1.10)	2.59 (0.95)	2.95 (0.97)	5.80** 誇>低・向
統率力の欠如	2.92 (1.05)	2.87 (1.03)	2.88 (1.13)	2.79 (1.11)	3.16 (0.88)	3.18* 誇>向
身体的魅力のなさ	2.94 (1.01)	2.88 (1.05)	2.95 (1.07)	2.82 (1.00)	3.15 (0.88)	2.75* 誇>向

注1) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

注2) 多重比較結果の略称は、Table 3と同じである

「友達づくりの下手さ」得点 ($F_{(3,544)} = 5.80, p < .01$), 「統率力の欠如」得点 ($F_{(3,544)} = 3.18, p < .05$), 「身体的魅力のなさ」得点 ($F_{(3,544)} = 2.75, p < .05$) の6下位尺度得点において、要因の効果が有意であった。そこで、多重比較を行ったところ、「異性とのつきあいの苦しさ」得点、「家庭水準の低さ」得点では、誇示希求群が低競争心群よりも得点が高く、「運動能力の低さ」得点、「統率力の欠如」得点、

「身体的魅力のなさ」得点では誇示希求群が向上心優位群よりも得点が高かった。また、「友達づくりの下手さ」得点では、誇示希求群が低競争心群・向上心優位群よりも得点が高かった。

考 察

結果のまとめ 本研究は、競争心のもち方による劣

等感の強さの違いを検討することで、青年期における劣等感と競争心との関連を明らかにすることを目的としていた。そこで、競争心の4下位尺度についてクラスター分析を行い、4クラスターを採用した。次に、競争心の4群ごとに劣等感8下位尺度得点を算出したところ、誇示希求群が8下位尺度得点すべてにおいて最高得点を示した。さらに、競争心の群を要因として、劣等感8下位尺度得点の比較を行ったところ、6下位尺度得点で要因の効果が有意であり、多重比較を行ったところ、いずれも低競争心群や向上心優位群に比べ、誇示希求群が高い得点であった。

誇示希求群からみた競争心と劣等感との関連 誇示希求群の特徴として、まず「自己アピール」得点の高さがある。誇示希求群の「自己アピール」得点は3.15であり、全体平均+1/2標準偏差よりも高く、4クラスターのなかでは高競争心群に次いで2番目に高い得点であった。西平(2006)は「競争心は周囲から賞賛を得たいという欲求から生じ」と述べているが、誇示希求群にみられる「自己アピール」得点の高さは、西平(2006)の指摘する「周囲から賞賛を得たい欲求」の現れであろう。このような他者へのアピールや賞賛を求める心性について、石川(1980)は、「自己の優位を他に誇示しようとするような青年の優越感への強い要求は、現実には自己の能力に対する自信の欠如や、自己の劣性に関する無力感などの劣等感を隠したり、否定しようとするもの」であると述べている。つまり、競争し勝つことで他者に自分の能力や存在を認めさせ、賞賛を得ようとしている誇示希求群の背景には、自信の欠如や劣性の隠蔽があると考えられる。そして、そのような誇示希求群は常に他者の存在を意識しているのである。

誇示希求群の別の特徴として、「向上心」得点の低さがある。誇示希求群の「向上心」得点は、全体平均-1/2標準偏差以下の2.99であり、4群のなかでも最も低い得点であった。古畑(2000)は、「自・他の勝ち負けについて比較をするのではなく、自己の進歩の具合を吟味し、目標との関係を明らかにし、目標と遂行とのずれを埋める努力をしながら、目標を少しずつ高める」という競争心の活用の仕方を示している。また、田中(2000)は、向上心と自己肯定感との関連を検討し、向上心のある青年は向上心のない青年よりも自己肯定感得点が高いことを示している。劣等感下位尺度得点が低かった向上心優位群に含まれる青年は、古畑(2000)が指摘するように、「自己の進歩の具合を吟味し」、「目標を少しずつ高める」ように、競争心を自己の成長・

進歩に活用することができ、それによって、自己肯定感も得ることができているのであろう。しかし、競争において自己の成長・進歩よりも他者を意識していると考えられる誇示希求群は、古畑(2000)が指摘するような有益な競争心の活用ができずに、自己肯定感も得られずにいるのであろう。

以上のことから、競争心のなかでも、他者からの承認・賞賛に焦点化された自己アピールの側面は劣等感を高め、自己の成長・進歩に焦点化された向上心の側面は劣等感を低減させると考えられる。「自己アピール」得点が誇示希求群よりも高かった高競争心群が、誇示希求群よりも劣等感8下位尺度得点が(統計的に有意ではないが)低かったのは、劣等感を低減させるという向上心の働きによるものであろう。

「学業成績の悪さ」・「性格の悪さ」に関する劣等感と競争心との関連について 競争心の群を要因として、劣等感8下位尺度得点について分散分析を行った結果、「学業成績の悪さ」得点と「性格の悪さ」得点では、要因の効果がみられなかった。

「入学試験はいうまでもなく競争である」(加藤, 2000)と言われるように、入学試験や、それを含めた学業は明らかに競争であり、定期試験の結果などから優劣が明確に示されるものである。一方で、学業において、成績が優秀であり、そのことを誇示したりすることは、周囲に敵意を抱かせ、いじめの対象とされることさえある(森田・清水, 1994)。このように、学業成績には競争が伴うことが明確であるがゆえに、あえて学業で競う姿勢を見せることはなく、また、優秀であることが敵意やいじめの要因となりうる現状では、優秀であることを他者にアピールしようとはしないと考えられる。そのため、競争心のもち方によって、「学業成績の悪さ」得点に有意な差がみられなかったのであろう。

性格については、目に見えるものではなく、また、どのような性格を“良い性格”とするかも個人によって異なるため、他者と競うということ自体がそれほど意味をもたない。そのため、競争心のもち方を要因としても、「性格の悪さ」得点について要因の効果が有意にならなかったと考えられる。

このことから、競争心と劣等感とは関連しているが、他者と比較する側面によっては、競争心がそれほど関わらない側面もあると言える。

競争心からみた劣等感の低減 既述の通り、本研究の結果から、競争心のうち、他者からの承認・賞賛に焦点化された自己アピールは劣等感を高め、自己の成長・進歩に焦点化された向上心は、劣等感を低減すると考えられる。つまり、自己を向上・成長さ

せるものとして競争を捉えている青年は、それほど劣等感を感じることはなく、競争し勝つことで自分の存在を他者に認めてもらおうとする青年は、劣等感をより感じているのである。

このような競争心と劣等感との関係を考慮すると、誇示希求群の青年の劣等感を低減させるには、ふたつの方法が考えられる。ひとつは、向上心を高めるといことである。つまり、競争を他者にアピールするためのものから自己を向上させるものとして捉えなおすことで、結果的に劣等感を低減させることができるのではないかと考える。そのように競争をとらえなおすことで、実際に劣っていた部分を向上・改善できれば、根本的な劣等感の解消にもつながるであろう。

もうひとつは、他者からの承認・賞賛の欲求を満たしてくれるような人物と出会うことである。落合(1989)は大学生を対象とした顔に対する劣等感に関する自由記述を得て、「自由記述の結果、誉められるといった他者からの評価の上昇や、劣った者を見るといった他者との関係による解消がかなり多く見られた」と述べている。また、「重要な他者による無条件の受容によって自尊感情が育てられていく」(佐藤, 2001)という指摘もある。今の自分を承認・賞賛してくれる人との出会いにより、他者からの承認・賞賛を求める欲求が満たされることで、他者を意識した競争心から脱却し、劣等感も低減するであろう。

引用文献

- Buss, A.H. (1986). *Social behavior and personality*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
(バス, A.H. 大淵憲一 (監訳) (1991). 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- 古畑和孝 (2000). 競争心 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井 豊 (編) 性格と対人関係 ブレーン出版 pp.136-150.
- 加藤敏之 (2000) 受験地獄 久世敏雄・斎藤耕二 (監) 福富 護・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明 (編) 青年心理学事典 福村出版 pp.388.
- 高良武久 (1976). 森田療法のすすめ 白揚社.
- 高坂康雅 (2006). 青年期における劣等感の発達の变化 日本青年心理学会第14回大会発表論文
- 集, 30-31.
- 石川 透 (1980). 青年期の情緒的発達 教師養成研究会・青年心理学部会 (編) 最新青年心理学 学芸図書 pp.59-60.
- 伊藤裕子 (1993). 自分は価値ある存在か 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一 (著) 青年の心理学 サイエンス社 pp.107-121.
- 森 省二 (2000). コンプレックスと競争心 児童心理, 50(14), 42-46.
- 森田洋司・清水賢二 (1994). 新訂版 いじめ-教室の病 金子書房.
- 西平 直 (2006). 競争・自信・劣等感-競争心をめぐって- 教育展望, 52(1), 30-37.
- 落合良行 (1989). 青年期にみられる顔に対する劣等感の分析 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 224.
- 落合良行 (1994). 青年期を中心とした生活感情の研究 橋口英俊・稲垣佳世子 (編) 児童心理学の進歩-1994年版- 金子書房 pp.195-226.
- 太田伸幸 (2001). 競争心概念の再検討-競争心の測定に関するレビュー- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 301-313.
- 佐藤逸子 (2001). 自尊感情喪失 杉原一昭 (編) 危機を生きる-命の発達心理学- ナカニシヤ出版 pp.81-86.
- 関口洋美 (2004). 競争心尺度作成の試み① 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 421.
- 関 計夫 (1954). 劣等感の心理 牧書店.
- 関 計夫 (1981). 劣等感の心理 金子書房.
- 返田 健 (1986). 青年の心理 教育出版.
- 高田利明 (1992). 他者と比べる自分 サイエンス社.
- 田中道弘 (2000). 青年の向上心と時間的展望との関連 日本青年心理学会第8回大会発表論文集, 28-29.
- 筒井健雄 (1975). 子どもが劣等感を抱く「とき」 児童心理, 29(11), 43-50.
- 山岸 宏 (1984). 劣等感の強い子 児童心理, 38(14), 153-155.
- 安塚俊行 (1983). 劣等感の構造(2) - YG 性格検査の分析 - 幾徳工業大学研究報告 A 人文社会科学編, 7, 53-57.

(受稿 9月28日: 受理11月8日)